

自然と生き物の色々な話

～木が無くなる仕組み～

森や林の中で倒れた木は、枯れ木となって地面に横になったままでいると、いつの間にか無くなってしまいます。硬くて丈夫な木がどうして無くなるのでしょうか。木は無くなったのではなく、ばらばらにされ地面の土になっていったのです。始めは土の養分を吸収して大きくなった木が、枯れて倒れたあと、虫や菌などの力で土に返っていく仕組みが自然には備わっているのです。

倒れた木が無くなる仕組み

木が
倒れる

菌やキノコ類が食べた木
をさらに分解しばらばら
にして植の栄養分にする

シロアリ、クワガタ
ムシ、ササラダニ等
が倒れた木を食べて
粉々にする。



クワガタムシ



ササラダニ



キノコ(スギヒラタケ)



さらに菌やキノコ類
が糞の中にある
粉々になった木を
食べる。

粉々になった木が糞
として出てくる



虫のお腹の中で起こっていること

倒れた木を食べたシロアリ、クワガタムシ、ササラダニなどの虫のお腹ではなにが起こっているのでしょうか？ 枯れ木は虫たちの食べ物ではありません。虫たちは枯れ木を食べているのではなく、枯れ木についている目に見えないほど小さな生き物を一緒にかじって食べているのです。その生き物と一緒にかじられて粉々になった枯れ木を食べる菌がお腹にいて、虫のおなかの中で糞をします。枯れ木を食べる菌がない虫もありますが、虫のお腹の中で粉々にされた枯れ木は、虫の糞として出されたあとは土の中にある菌が食べて土の栄養分にします。

菌にとっては大きなものより小さなものの方が食べやすいので、虫たちは菌が枯れ木を食べやすくするための手助けをしていることとなります。

虫のお腹の中で起こっていること。

